

ペニシリン増強剤による淋疾治験例に就て

金沢医科大学日置内科教室(主任 日置教授)

脇 本 賢 次

Kenji Wakimoto

(昭和24年11月1日受附)

緒 言


曩に著者が淋菌発育阻止に対するペニシリンと主としてスルファ剤との協同効果に関する一聯の試験管内試験を行つた結果 Acetsulfamin, N⁴-Acetylamino benzolsulfonamid, p-Acetylamino benzol, p-Acetylphenetidin 及び 3-Nitro-4 hydroxybenzolsulfonamid に於て陽性成績を得た。然し乍らその中 Acetsulfamin 及び N⁴-Acetylamino benzolsulfonamid の二者は夫自身阻止力も大であり、増強作用も亦優秀と認められたので、今この二製剤を以て臨牀実験を行つた結果を報告する。

借翻つて今日淋疾治療界を展望するに、本疾患のペニシリン療法が提唱されて以來のその治癒率は著しく昂められた。即ちリバ、シミッドラツプ、ボスフェース等¹⁾は米陸軍に於ける薬剤抗性淋疾患者 450 例に就て先づペニシリン 16 万單位使用によつてその 98% を治癒せしめた事を報告してゐる。又本邦に於ても谷村は 97 例の

男女淋疾にペニシリン 21 万單位使用しその治癒率 92.8% を挙げた。その他斯様な報告に就てはその数が頗る多いが、その成績を仔細に検討するに少数例に於て大凡充分と目されるペニシリン量を用ひても猶且充分に治癒しない難症がある事が窺ひ知られる。即ち淋疾の大部分は今日ペニシリンを以て容易に治癒せしめられるのであり、之等のものに向つて特にペニシリンと上掲藥物との併用効果を挙げ、その單なるペニシリン治療に優れたる事を実証せんとする事は甚だ困難であるが、若しや之等臨牀上所謂ペニシリン抵抗性淋疾を撰択して如上の併用療法を試み期待するが如き効果を得たならば、著者の併用効果に関する基礎的実験成績が臨牀的にも適用せられるものである事が判明するであらうと斯様に考へて、専らペニシリンのみの治療で難治な症例を集め之を対象とする方途を採用する事とした。

実 施 方 法

撰擇された臨牀上ペニシリン抵抗性と考へる患者に對しペニシリンを一定量の Acetsulfamin 5% 溶液又は N⁴-Acetylamino benzolsulfonamid (CH₃CONH

 SO₂NH₂) 0.5% 溶液に溶解し、其儘型の如く 2 時間毎 4 回の筋肉内注射を行つた。

臨 牀 実 験 成 績

症例 I 乙〇松〇郎 ♂ 66 歳
病名 慢性淋菌性前部尿道炎
當患者は約 30 年前相當重症の淋疾を病み、現病はその再感染と思はれるものである。

本患者に於てはペニシリン 10 萬單位注射により普通ならば既に淋菌の迅速な減少を見る可きに不拘猶菌の存在を認め、併用療法により尿中淋菌の激減を來し其後著者は外來を訪れない。唯併し本症例に對し或はペ

第1症例 処置概要並淋菌消失度

病 日	處 置	淋 菌
I	處 置 前	(+++)
II	ペニシリン10萬	(+++)
III	ペ10萬+アセトスルファミン 5%20cc	(++)
IV	同 上	(±)

ニシリン單獨治療3回連續，全量30萬單位のみを以てしても治療し得たかも知れないと言ふことが問題になり得る憾なきを保しない，
症例 II 小○某 ♀ 26歳

病名 亞急性淋菌性前部尿道炎
本治療を受ける約10日前某處2箇所にてペニシリン合計 120 萬單位の注射を受けたがすべて無効に終つてゐる。

第2症例 処置概要並淋菌消失度

病 日	處 置	淋 菌
I	處 置 前	(+++)
II	ペ20萬+アセトスルファミン 5%20cc	(++)
III	同 上	(+)
IV	同 上	(±)
V	ロメヂン 5%10cc 2 回注	(-)

本例も亦臨牀上ペニシリン抵抗性淋疾と考へられるものである。本例に於て後の治療試験に用ひたべ全量は60萬單位と云ふ可成の大量に上るけれ共，之が特に興つて力があつたのでないと言ふ事は數日前に 120 萬單位を使用して効がなかつたことで一應之を肯定し得る。唯 5%アセトスルファミン 20cc を 3 日連用すること丈で宜くはなかつたかと言ふことが残されるのみである。

症例 III 酒○二○ ♀ 22歳
病名 亞急性淋菌性前部尿道炎兼右急性淋菌性副睪丸炎
本例は約 2 箇月前淋疾に罹患したが何等處置を受ける事なく放置した。かかる中に本治療を受ける約 1 週間前より右睪丸の腫脹，發赤，自發痛に氣付き驚いて醫療を乞ふたものである。
本患者は淋菌性前部尿道炎に右側の副睪丸炎を合併

第3症例 処置概要並經過

病 日	處 置	睪 丸 の 症 狀			淋 菌
		大 い さ	發 赤	壓 痛	
I	處 置 前	小兒手拳大	(+)	(++)	(+++)
II	ペ30萬(油 腫)	雞 卵 大	(-)	(++)	(++)
III	ペ10萬+アセトスルファミン 30% 5cc (溜水15ccに溶解)	雀 卵 大	(-)	(+)	(+)
IV	ペ20萬+アセトスルファミン 30%10cc (溜水10ccに溶解)	正 常	(-)	(±)	(+)
V	ペ10萬+アセトスルファミン 30% 5 cc (溜水15ccに溶解)	正 常	(-)	(-)	(-)
VI	處 置 せ ず	同 上	(-)	(-)	尿前盞(-) 尿後盞(-)

せる例である。かかる症例がペニシリンを以てしても早急に治癒しない事が多い事は大方諸家の認める所であり且常識である。現に本例に於て最初のペニシリン(油蠟)30萬單位注射が失敗に終り、後の40萬單位で効を奏した事はその結果がアセトスルファミン併用によるものであると認めるべきである様に覺えしめる。

症例 IV 中○米○ ♂ 36歳

病名 再燃性淋菌性前部尿道炎

本例は10日程前淋菌性前部尿道炎に罹患し某處に於てペニシリン70萬單位の注射を受け一旦排膿及排尿痛は消失したが、3日程前より再び排膿及排尿痛を認め本治療を受けたものである。再感染の疑はなく前病の再燃と見なされるものである。

本患者には最初スルファチアゾールの内服を行つて


第4症例 処置並淋菌消失度

病日	處 置	淋 菌
I	處 置 前	(+++)
II	スルファチアゾール14錠内服	(+++)
III	ペニシリン40萬+アセトスルファミン10%20cc	(-)

るが、之は被保険者診療上の都合によつてなされたものでこの事が偶然スルファチアゾール抗性淋疾である事も示した例である。最初の70萬單位で治癒せず、後の40萬單位で再發を見なかつたと言ふことは矢張りアセトスルファミン併用の効果を有力に語るものと見なしたい。


症例 V 石○好○ ♀ 32歳

病名 慢性淋菌性子宮周圍炎兼陰炎

白帯下と下腹部の自發痛及壓痛を主訴とする患者で膿性分泌物中には多數の淋菌が認められる。主訴は約1箇月前或はそれ以前から認められたものの如くである。本例にはペニシリンと N⁴-Acetylamino benzolsulfonamid (CH₃CONH  SO₂NH₂) 0.5% 溶液を使用した。

慢性の婦人科的淋疾はその病竈の單純ならざる時治

処置並経過概要

病日	處 置	帯 下	淋菌
I	處 置 前	黄色の白帯下多量	(+++)
II	〜10萬+ CH ₃ CONH  SO ₂ NH ₂ 0.5% 50cc	白帯下の減少	(+)
III	同 上	白帯下消失、頸管口に漿液性粘膜炎分泌物少量	(-)
IV	同 上	上皮細胞の増加及陰桿菌の増殖	(-)
V	約20日間後再検	同 上	(-)

癒し難い事及再燃し易い事は本學吉池氏の報告によつても明らかである。即ち氏は7例の慢性淋菌性附屬器炎患者に各々總量40萬單位のペニシリンを3萬乃至5萬單位宛3時間毎連續使用し、その経過を觀察せしに全患者に於て注射開始後24時間後一應淋菌の消失を認める。然し乍ら注射終了後3日目乃至5日目には全症

例に於て淋菌の増殖が認められた。この事實と比較するに著者の例は僅かに20萬單位ペニシリンと上記スルファミン誘導體併用により20日間後も淋菌の出現を認め得なかつた點に於て秀れた成績と言はねばならない。

考 按

諸以上の諸症例は兎も角もペトアセトスルファミン併用により治療の目的を達し得たべ抵抗

性淋疾に属するが、而も猶此場合特にアセトスルファミンのみを以てして奏効し得た症例でな

かつたか、又アセトスルファミンを以てせずとも他のスルファ剤を併用しても同じく所期の目的を達し得たのではなかつたのではなからうかと言つた疑問が完全に解かれてゐない。実に臨牀実験では多くの対照例を設ける事が困難であるから余程の難治と定つてゐる疾患でない限り完全なる証明は至難と言はねばならない。

著者は無論此点を深く承知してゐるものであ

つて、唯著者の両剤併用に関する基礎的実験の成績が斯る臨牀成績とも矛盾する事がないと言ふ結果に僅に満足せざるを得ないのであるが、その眞実は將來に於て決する事と信ずる。孰れにしてもべに對し頑強に抵抗を示した淋疾例が此方法を以てして好成績を得ると言ふ事は斯様な意味に於て猶検討を要するとしても、一應正しいとして差支へあるまい。

結 論

1) 著者が曩に淋菌に對しペニシリンと主としてスルファ剤との協同効果に関する試験管内にもとづき、N¹-Acetylamino benzolsulfonamid (Acetsulfamin) 及び N⁴-Acetylamino benzolsulfonamid とペニシリンの同時併用により、比較的難症と思はれる男女淋疾5例に就て臨牀実験を行ひ殆んど全例治癒の優秀なる成績を収め

た。

2) 無論此成績をのみを以て臨牀的に両剤併用の妙が立証せられたとなすには猶種々検討を要すべきものがあるのであるが、以上の成績は獨り難症淋疾に對してのみならず一般治淋問題に付き一應参考となり得べきものが尠くないと信ずる。

文 献

- 1) 谷村：日本臨牀，5，11，31. より引用。
 2) 市川：日本臨牀，5，11，35. 3) 田村：ペニシリン，1，1，19. 4) 柴田：最近の化學療法，S. 190. 5) 佐々：最新化學療法，S. 61.

- 6) 野村，大桑：ペニシリン，1，4，244. 7) 市川，大越：臨牀，2，5，4. 8) 吉池：日本婦人科學會北陸地方部會昭和22年度秋季例會會報.